

(4) チャレンジ ジャンプ(養える力:瞬発力、巧緻性、持久力、協力、公正)

回旋跳びで、連続してなわを何回跳べたかを競う。制限時間は3分間

ア 準備

- ・長なわ又は、なわとび用グリップ付き長なわ

イ 方法

- ・跳ぶ児童の並び方は自由とする。
- ・なわを回し、全員が跳ぶことができたなら1回とし、継続して跳ぶことができた回数を記録とする。

少なくとも児童8人がなわを跳び、2人までなわを回すことができる。また、グループ全員で跳んで、教師や他のグループの児童等がなわを回してもよい。

- グループ編成の仕方は下記ウを参照
- 継続して回旋跳びが続いた回数を記録とする。ただし、最長3分間で終了とする。
- 連続した回旋とびが途切れてしまい、再度開始した場合は、最初から時間と回数を計り直す。

ウ グループ編成

- ・学級の児童を10人以上のグループに分ける。
- ・教員または支援員等の大人と他のグループの一員である児童は、グループの1人として人数に数えてはいけない。

※ グループの不成立例（児童を10人以上のグループに編成していない）

児童34人をA10人、B8人、C8人、D8人の4つのグループに分け、Aグループのなわを回す児童2人をB、C、Dグループのなわを回す係も兼任させた。

○児童34人学級の場合、次のような4つのグループ編成が考えられる。

(例1)

Aグループ10人、Bグループ10人、
Cグループ14人と編成する。
(この場合、3つのグループの跳んだ合計
回数を3で割った数が記録となる。)

A	B	C
10人	10人	14人

(例2)

1グループの人数を10人とせず、例えば
Aグループ11人、Bグループ11人、
Cグループ12人と編成する。
(この場合、3つのグループの跳んだ合計
回数を3で割った数が記録となる。)

A	B	C
11人	11人	12人

(例3)

各グループの人数を、例えばAグループ16人、

A	B
16人	18人

Bグループ 18 人とし、2つのグループで行う。
(この場合、2つのグループの跳んだ合計回数を
2で割った数が記録となる。)

(例 4)

34 人の 1 グループで行う。
(この場合は、このグループの跳んだ回数が
記録となる。)

※ 学級児童数 34 人の場合、4 グループでの編成は不可能

- ・児童が 9 人以下の学級は、異学年の児童を加え、10 人にして行う。ただし、記録登録は最も上の学年の児童が在籍する学年とする。
- ・児童が 11 人から 19 人の学級で、2つのグループに分けて実施する場合は、異学年の児童を加え、20 人にして行う。ただし、記録登録は、最も上の学年の児童が在籍する学年とする。
- ・特別支援学級及び小学部の学級については、3人以上がなわを跳ぶグループを編成する。特別支援学級で、なわを跳ぶ児童が、3人に満たない場合は、特別支援学級に在籍する児童と同学年の通常学級児童を加えて行う。

エ 記録と参加人数

- ・登録について、例：「1 年生が 7 人、2 年生が 1 人で実施した場合」、2 年生の人数が圧倒的に少なくても、記録登録は、最も上の児童が在籍する学年とするため、2 年生の記録で登録することになってしまいます。「みんなでジャンプ」では、このような場合が考えられますので、注意してチャレンジください。
- ・学級で 10 人以上のグループを、複数つくって行った場合は、各グループの跳んだ回数の合計をグループ数で割り、その平均回数を記録とする。平均回数が小数となった場合は、小数第 3 位を切り捨て、小数第 2 位までとする。
- ・1つのグループで実施した場合は、そのグループが跳んだ回数を記録とする。
- ・特別支援学級及び小学部の学級が、3人以上のグループを複数つくって行った場合は、グループの中で最も多い回数を記録とする。参加人数は、そのグループの人数とする。
- ・複数のグループで実施した場合、実施日はすべて同じでなければならない。
- ・通常学級の参加人数は、各グループのなわを跳んだ児童数の合計とする。ただし児童がなわを回した場合は、なわを跳んだ児童数となわを回した児童数の合計とする。教師等の数は含めない。

オ 実施上の注意等

- ・実施場所は、運動場。または、体育館等とする。
- ・使用するなわの長さや種類は自由とする。
- ・児童、教職員または保護者等がなわを回す。
- ・記録挑戦の際は、原則として教師の立会いのもと実施し、計測する。